



# Messidor Ensemble

メシドール・アンサンブル演奏会

2010年12月12日(日)

ティアラこうとう小ホール

メシドール・アンサンブル演奏会  
～ウィーンの街と音楽～

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト  
フルート四重奏曲 第4番 イ長調 KV. 298

第1楽章 *Andante*

第2楽章 *MENUETTO*

第3楽章 *RONDEAUX: Allegretto grazioso, ma non troppo presto,  
però non troppo adagio. Così-così-con molto garbo ed Espressione.*

フランツ・シューベルト  
弦楽四重奏曲 第14番 二短調「死と乙女」D. 810

第1楽章 *Allegro*

第2楽章 *Andante con moto*

第3楽章 *SCHERZO: Allegro molto*

第4楽章 *Presto*

————— 休憩 (10 分間) —————

ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン  
ピアノ三重奏曲 変ロ長調「街の歌」Op. 11

第1楽章 *Allegro con brio*

第2楽章 *Adagio*

第3楽章 *TEMA con Variazioni: Allegretto*

ヨハン・シュトラウス二世  
皇帝円舞曲 Op. 437 (シェーンベルクによる七重奏編曲版)

フルート：金井 麻子  
クラリネット：金内 智恵  
ピアノ：大月 礼子

ヴァイオリン：宇野 格  
孫 尚卿  
ヴィオラ：林 俊夫  
チェロ：坂本 謙太郎

2010年12月12日(日) 14時00分 開演  
ティアラこうとう 小ホール

この演奏会に当って林徹也先生にご指導を頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。

ある録音テープに残された会話  
～曲目解説に代えて～

・・・ガヤガヤ・・・

A：ウィーンの街と音楽？どういう意味かしら？

B：どれどれ。ああ、ウィーンゆかりの作曲家・作品を集めたんだな。

A：音楽の都ウィーンですね。

B：うん。18世紀末のオーストリア皇帝ヨゼフ二世（位 1765-90）が音楽を保護したのを契機に、首都ウィーンには一流の音楽家やその教えを乞う人が大勢集まったんだ。

A：今でいう学園都市か産業集積地？

B：そう。そういう場所では、人々が情報交換し、刺激しあい、競って先進的なものを生み出すでしょ。芸術の都パリ、ITのシリコンバレー…。

A：映画の聖地ハリウッド！！

B：それもそうだね。さて、最初はモーツァルト（1756-91）のフルート**四重奏曲第4番**か。第1～3番は若い頃の作品だけど、これはウィーンに移り住んだ後、円熟期の作品だ。

A：この第3楽章、長々とした横文字は何でしょうね？

B：発想記号、つまり曲の形式・テンポ・雰囲気演奏者に指示するものだよ。こいつは史上最長かもな。

A：RONDIEAUX というのはダンスのロンドのフランス語ですか？

B：うーん。フランス語にそんな言葉はないよ。ロンドをフランス語風にしたんだな。サンドウィッチを韓国語風にパンニナムハサムダというようなものかな。

A：へ？ あ、赤くなってる！！

B：おほん。その後ろは「快速で優雅に。かといってあまり速すぎず、さりとしてあまり遅すぎず。そうそうそんな風に思いっきり気取って、表情豊かに」というような意味だ。

A：要するに？

B：単なる言葉遊びでしょ。作曲を依頼した人、演奏者、聴衆と、こうやってジャレていたんだよ。

A：当時のウィーンってそういう雰囲気だったんですね。楽しそう。

B：だね。時代順に行くと次はベートーヴェン（1770-1827）のピアノ**三重奏曲「街の歌」**か。モーツァルトが一旗揚げるためにウィーンに行ったのに対して、ベートーヴェンは作曲の勉強に行ったんだ。

A：留学ですね。で、修行が終わった後もそのまま住み付いた、と。

B：そう。でもこの曲を書いた1797年頃はまだ勉強中かな。普通ピアノ三重奏と叫べたら楽器は？

A：えっ？ ヴァイオリン、チェロ、ピアノだと思いますけど…。

B：ここではヴァイオリンの代わりにクラリネットが使われている。室内楽曲で管楽器を使って演奏効果を確認するのは、後々オーケストラの曲を書くための修行だったんだ。

A：へ～。「街の歌」というのは？

B：第3楽章の変奏曲の主題として、当時ウィーンの街で流行っていた歌の旋律を借りているからこういう名前があるんだ。

A：それって盗作じゃあ…。

B：いや。録音機器がない時代は、お気に入りの旋律を気軽に楽しむために、こういうことがよく行われたんだよ。

A：じゃあ、借用は当たり前だった？

B：そうだね。さっきのフルート四重奏曲なんて全ての楽章で他から借用した旋律が使われているよ。いずれも当時のウィーンで流行っていた曲だ。

A：なるほど～。じゃあシューベルト(1797-1828)の**弦楽四重奏曲「死と乙女」**は？予習してきたんでしょ？聞いてあげますよ。

B：む！！聞いてあげますう？

A：まあまあ。シューベルトは何のためにウィーンに来たんですか？

B：彼は来たんじゃない。ウィーン生まれ、ウィーン育ちだ。

A：生粋のウィーンっ子か～。

B：ヨゼフ二世が整備した音楽教育体制が生み出した最初の大作曲家と言っても良いかもしれない。

A：大作曲家？そういえば学校の音楽室に肖像画がありましたよ。『魔王』っていう歌も聴いたな。

B：よく覚えているなあ。シューベルトは600以上の歌曲を作曲したんだけど、その多くはウィーンの街角のカフェで友人達に囲まれながら構想したものだよ。

A：まさにウィーンの街が生んだ音楽ですね。『死と乙女』もその一つ？

B：うん。乙女と死神の対話を描いた歌だ。恐れ慄く乙女と死神の甘い誘いが絶妙の対比になっている。

A：あっ！その旋律を転用したから同じ名前が付いてるんだ！！

B：ご明察。歌曲のピアノ伴奏が四重奏曲の第2楽章の旋律になっている。でも、僕にはその他の楽章にも死と乙女の対比があるように感じられるよ。シューベルトが晩年体調を崩していた頃の作品だから、死の配合率高めだけど。

A：え～と、暗くなっちゃいましたね。気を取り直して、最後はシュトラウス二世(1825-99)の**皇帝円舞曲**ですが…。ウィーンと言えばニューイヤーカーコンサートのワルツ！！

B：ワルツ(=円舞曲)は今でこそウィーン名物だけど、オーストリア帝国では長年に渡ってご法度だったんだよ。男女が体を密着するはしたないダンスだという理由でね。

A：か、体を密着…。

B：19世紀になるとお上もワルツの大流行を抑えきれなくなったんだけど、それは君みたいな人が大勢いたからだろうね。

A：変態！！

B：いや、そうじゃなくて…。いつの時代もタブーを犯すようなものが流行るってこと。ナポレオン戦争後のウィーン会議(1814-15)に集まった各国の首脳も夜ごとワルツに夢中になったらしい。

A：「会議は踊る」のウィーン会議？

B：まさしく。とはいえ、その時代のワルツはまだ音楽として荒削りだった。元々は農民のダンスだからね。それを音楽だけでも楽しめるほど洗練させたのがシュトラウス一世(1804-49)とその息子たちなんだ。

A：華麗なる一族ですね。

B：それ以上かな。特にワルツ王と呼

ばれたシュトラウス二世の書齋なんてパイプオルガンがあったらしいよ。それほどの栄華を極めた作曲家なんて他に思いつかないよな。

A：大人気だったんですね。

B：国内外問わず、ね。彼は国を代表して諸国を訪ねる民間外交使節でもあった。皇帝円舞曲はプロイセンを訪れる際に、オーストリアとの友好の印として書いた曲だ。

A：羨む人も多かったでしょうね。

B：このシェーンベルク(1874-1951)なんてその代表格だと思うよ。

A：あ〜、理解しがたい音楽を書く人ですね。

B：そう言われるのも仕方ないな。彼の音楽は、未だに理解されているとは言えないからね。でも偉大だよ。

A：どれ位？

B：どれ位って…見方によってはバッハ(1685-1750)と同じ位。『平均律クラヴィア曲集』は知ってる？

A：い、一応…。

B：1 オクターブには 12 の音があるでしょ。それぞれを主音(ドの音)にすると長調・短調あわせて 24 の調性と音階(ドレミファ…)が出来る。その 24 のどれを使ってもちゃんと曲ができることを、バッハはこの曲集で証明したんだ。この考え方はその後ずっと西洋音楽の基礎だった。

A：シェーンベルクは？

B：12 の音を全て同列に扱う音楽を考えて、音階とか調性の概念を取っ払った。要するにバッハ以来の考え方を根本から覆したんだ。

A：じゃあ、この皇帝円舞曲も覆っちゃってるんですか？

B：それは僕も知らない。滅多に聴けない曲だからな。でも楽しみだよ。彼はそれまでの音楽の形式や理論、楽器の性質を知り尽くして、自在に操ることができた人だからね。

A：すごいんですね。そんな人が何でシュトラウスを羨むんですか？

B：愛が一方通行だから。僕と同じで。

A：はっ？

B：シュトラウスが同時代の人々に大人気だったのに対して、シェーンベルクはなかなか認めてもらえなかった。だから、職を求めて何度も故郷ウィーンを離れなければならなかったんだ。

A：それでもウィーンが好きだった？

B：3度も戻ってきているところみると、たぶんね。最期は米国ロサンジェルズだったから、愛は最後まで一方通行だったんだね。

A：かわいそうですね。

B：でしょ？ でしょ？

．．．ブー．．．

A：あ、開演のベル。おしゃべりはまた後にしてくださいね。

以上は演奏記録用に設置された録音テープに残された客席の会話を文書化したものです。声の主は不明であり、従って、内容に関して音楽学的見地からの真偽は確認されておりません。

## メシドール・アンサンブル

「メシドール」とはフランス革命暦にある月の名前の一つで、現在の6月19日から7月18日に相当する。初回の演奏会がこの時期だったことが団体名の由来。以来この時期の演奏会開催が多いが、語感の爽やかさとは裏腹に、日本では梅雨に当たるのが悩みの種。

演奏会のたびに「いつか演奏したいと思っていた曲」を携えた有志が集う緩やかな集団を標榜しており、毎回楽器編成・メンバーの顔ぶれが変わる。これまでに参加したメンバーは、社会人、学生、主婦、職業音楽家まで36名にものぼる。37人目はあなたかもしれない！！

### これまでの演奏会

#### 第1回（2002年7月13日 於：新宿文化センター 小ホール）

メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲 第1番 二短調 Op. 49（フルート版）

ブラームス：クラリネット五重奏曲 四短調 Op. 115

#### 第2回（2003年7月6日 於：幕張ベイタウンコア 音楽ホール）

ハイドン：弦楽四重奏曲 二短調「五度」 Op. 76-2

ビゼー／シンプソン：フルート・チェロ・ピアノのためのカルメン幻想曲

ドヴォルジャーク：弦楽四重奏曲 へ長調「アメリカ」 Op. 96

#### 第3回（2004年2月15日 於：新宿文化センター 小ホール）

モーツァルト：フルート四重奏曲 第1番 二長調 K. 285

オーボエ四重奏曲 へ長調 K. 370

アダージョとロンド 八短調 K. 617

ピアノ四重奏曲 第1番 ト短調 K. 478

#### 第4回（2004年11月20日 於：ティアラこうとう 小ホール）

メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲 第1番 変ホ長調 Op. 12

キュフナー（伝ウェーバー）：クラリネット五重奏のための 序奏、主題と変奏

シューベルト：ピアノ五重奏曲 イ長調「罇」 Op. 114

#### 第5回（2005年7月10日 於：ティアラこうとう 小ホール）

ヴォルフ：イタリアのセレナーデ ト長調

モーツァルト／ヴェント：フルート四重奏のための『魔笛』より抜粋

チャイコフスキー：弦楽四重奏曲 第1番 二長調 Op. 11

#### 房音くらぶ 音楽祭（2005年8月20日 於：南総文化ホール 小ホール）

モーツァルト：弦楽五重奏曲 第4番 ト短調 K. 516 より第1楽章

#### 第6回（2006年4月30日 於：ティアラこうとう 小ホール）

モーツァルト／ロットラー：木管五重奏曲 八短調（弦楽五重奏曲 第2番 K. 406 の編曲版）

ベートーヴェン：七重奏曲 変ホ長調 Op. 20

クリスマス・コンサート (2006年12月17日 於:西千葉 カフェ・エラブル)

モーツァルト:フルート四重奏曲 第1番 二長調 K. 285

ヴィヴァルディ:『四季』より「冬」 他

第7回 (2007年5月13日 於:ティアラことう 小ホール)

ベートーヴェン:アダージョとロンド (六重奏曲 変ホ長調 Op. 81b より)

ボロディン:弦楽四重奏曲 第2番 二長調

モーツァルト:ディヴェルティメント 第17番 二長調 K. 334

第8回 (2008年6月29日 於:ティアラことう 小ホール)

バッハ:管弦楽組曲 第2番 口短調 BWV1067

シューベルト:八重奏曲 へ長調 D. 803

美浜音楽祭 (2009年3月21日 於:幕張ベイタウンコア 音楽ホール)

メンデルスゾーン:ピアノ三重奏曲 第1番 二短調 Op. 49 (フルート版)

第9回 (2009年6月21日 於:ティアラことう 小ホール)

シェーンベルク:浄夜 (弦楽六重奏版) Op. 4

ブラームス:弦楽六重奏曲 第1番 変口長調 Op. 18

第10回 (2009年11月22日 於:ティアラことう 小ホール)

モーツァルト:フルート四重奏曲 第1番 二長調 K. 285

プーランク:ピアノと管楽器のための六重奏曲

チャイコフスキー:弦楽六重奏曲 二短調 Op. 70 「フィレンツェの思い出」

2010年霧降の森ジョイントコンサート (2010年6月13日 於:日光フィンチホール)

モーツァルト:フルート四重奏曲 第1番 二長調 K. 285 より第1楽章

ベートーヴェン:弦楽四重奏曲第7番<ラズモフスキー第1番>Op. 59-1 より抜粋

バッハ:管弦楽組曲 第二番 口短調 BWV1067 より "Badinerie"

第11回 (2010年7月3日 於:ティアラことう 小ホール)

ベートーヴェン:弦楽四重奏曲第7番<ラズモフスキー第1番>Op. 59-1

ラインベルガー:九重奏曲 変ホ長調 Op. 139

幕張ベイタウンコーラスの集い(2010年10月31日 於:幕張ベイタウンコア 音楽ホール)

モーツァルト/ヴェント:フルート四重奏のための『フィガロの結婚』より抜粋

メシドール・アンサンブルの公式ウェブサイト

URLが変わりました



<http://artist.musicinfo.co.jp/~messidor/>

出演者のプロフィール・今後の活動予定・

これまでの録音等、コンテンツ豊富です。



## 出演者の横顔

### フルート：金井 麻子

10歳でフルートを、15歳でオーケストラ活動を始める。上智大学管弦楽団、オーケストラ・ディマンシュ、幕張ベイタウンオーケストラ、美浜音楽祭祝祭管弦楽団等で首席奏者を歴任。結婚後姓は変わっているはずだが、チラシ制作担当者が変え忘れたため、以後旧姓で通している。現在メシドール・アンサンブル公認専属炊事係（飯どーる）を務める。

### クラリネット：金内 智恵

10歳でクラリネットを始める。上智大学管弦楽団入部早々に常任指揮者汐澤安彦氏に見出され、在学中最初の定期演奏会から首席奏者として参加。卒業演奏会ではウェーバーの協奏曲を演奏した。当団には第1回来断続的に出演し、その間に2度の出産を経験。育児をこなす傍ら、仕事もし、練習後の飲み会はかかさず参加するという少子高齢化時代の模範的演奏者である。

### ピアノ：大月礼子

幼少よりピアノの手ほどきを大月投網子氏に、高校在学中は石澤秀子氏に同時に師事。高校2年終了後渡米、ジュリアード音楽院、ニューヨーク市立大学ハンターカレッジにてピアノをレオナード・アイスナー氏、ルイーズ・タルマ氏に師事。ドロシー・ホルコム、マーティン・オルマンディ、ケネス・ゴードン、ラルフ・メンデルソン各氏のもと、アンサンブル・伴奏法の研鑽を積む。ジーナ・バクハウワー、シュラ・チェルカスキー、マグダ・タリアフェロ各氏の公開ピアノレッスン生に選抜される。ニューヨークホクイーンズボローオーケストラ、ハンターカレッジオーケストラ、ジュリアードオーケストラ、東京プロムナードフィルハーモニカーと協奏曲を協演。大月投網子一門で親戚にあたるフジコ・ヘミングとの共演も多い。

### ヴァイオリン：宇野 格

4歳よりヴァイオリンを始め、高校、大学、某ITメーカーとそれぞれの所属先でオーケストラに属し、コンサートマスターを務める。時折仕事として演奏することもあるらしい。知っている曲はジャンルを問わず即座にヴァイオリンで演奏できるという特殊能力を持ち、当団演奏旅行の朝はラジオ体操の伴奏を担当する。

### ヴァイオリン：孫 尚卿

ピアノを柳桂子氏、ヴァイオリンを上月恵氏・金田幸男氏に師事。早稲田大学交響楽団で第二ヴァイオリン首席奏者を務める。学生時代に出演した演奏会で捕獲され、当団主宰者の職場でアルバイト勤務。その働きぶりを踏まえた「君は研究者よりも営業向き」といういい加減な助言を真に受けて、セールスエンジニアとして計測器メーカーに就職。今のところ生き生きと働いているようなので、主宰者も一安心である。

### ヴィオラ：林 俊夫

5才よりヴァイオリンを始め、大阪大学交響楽団、大阪モーツァルトアンサンブル、東京ムジックフロー、アンサンブル70sなどでコンサートマスターを歴任。心を慰める音色に惹かれて30代半ばよりヴィオラに取り組み、現在は林徹也氏（元シュトゥットガルト室内楽団首席奏者）に師事している。建材の営業のため全国を飛び回る傍ら、月何回かの演奏会をこなす。

### チェロ：坂本 謙太郎

13歳からコントラバスをはじめ、15歳でチェロに転向。菅野博文氏（昭和音大教授）、フランツ・バルトロメイ氏（ウィーンフィル首席奏者）らに師事。当団を主宰する傍ら、経営コンサルティング会社に勤務。36人の出演者のうち、全ての演奏会に出演している唯一の奏者でもある。

当ページの内容は若干の誇張と多分な言葉遊びを含んでいます。